

「ぼくはこうして大人になる」 長野まゆみ著

「性」と「家族」の境界 こまやかに

印貝一は、十ちがいの双子の姉兄から自分を女だと思いこまされ育てられてきた。物語は主人公の一人称の語りの中で、彼の学校へある日、姉の恋人の弟、七月が転入してくるところから急展開してくる。一と七月は深層でひきあいながらも、表ではつよく反発する存在である。そこに一の性愛傾向を知る幼なじみの健、ひそかに一が好意を抱く令哉、一に恋をする女生徒、薫とが交錯しあう。

一はすでに自分が印貝家の養子であることを知っていて、その秘密を共有する従兄とは深い関係にある。しかし、この作品は一の理知的かつ冷静な視点からこの「性」と「家族」の境界をこまやかに、そして均等に描きとっている。もちろん十五歳の精神がこれに持ちこたえ続けられるはずもなく、やがて無残にもやってくる自己破綻を作者は忌避したりしない。むしろここに思春期に対峙これまで言い古されてきた、大人への準備としての役割ではなく、全人生における人間性の回復のきっかけがあると言おうとしているようである。

一思い出に価値を認められる人間は、たぶん幸福な生涯を過ごすだろう。自分の存在を疑わないということだから。一この言葉は痛烈だ。題名の『なる』は彼の現在という地点からの意思表示でもある。だがほとんどの中学生たちは多かれ少なかれ絶望を背負いながら、それぞれの立場でまた大人へ向けての模倣を繰り返します。一に生きる根拠は見出せるのか。彼の不確かな「性」の意識像は、ほんとうに姉兄の力だけによるものなのか。

謎が解けていくラストのくだりは、哀愁と切なさに満ちている。真実を知った一が何を求めるかも、ここでは伏したい。生と死、希望と絶望は紙一重であり、憎悪する対象が一瞬にして愛すべき者へ変わることもある。光は向こうからやってくるのだ。

最後に、この作品が奇抜な発想ながら風俗に偏らなかつたのは、デビュー以来色褪せない作者の硬質な文体へのこだわりにあることをつけ加えておく。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

長野まゆみ



ぼくはこうして大人になる

大和書房・1200円